

sumu 季刊 冬
Quarterly Magazine Winter 2017

60

住む



特集

家の改修、
直すところ、
残すもの。

[集中講座] 木の家を、知る。

木の家の
耐久性はどこで
決まるのだろう。



築46年、 三角屋根の 別荘が蘇る。

その昭和の別荘は、福島県裏磐梯の
国立公園の中に建っていた。自然に覆われ老朽化が進むこの建物を、骨格を残し再生する計画が立ち上がった。小さな三角屋根の別荘を、再び濃い緑の中で人々がくつろぐことのできる場所に。建築家の益子義弘さんが読み解いた建物と改修の方法を聞く。

文・山口由美 写真・飯貝拓司

裏磐梯の「くるみの森」という別荘地に建つ一九七〇(昭和四五)年築の別荘が、アルト・ロッジの元となった建物だ。「形状だけはかわいいね」とオーナーの宗像剛さんが気に入った外観は、三角屋根が印象的なスキーロッジ風。これが建てられた高度経済成長時代には、日本各地のスキー場や高原リゾートで好まれたデザインだ。それらの多くはいま、朽ち果てようとしている。これがまた、そうであったように。

「再生というよりは、蘇生でした。半死にかけていたのですから」と宗像さんは冗談まじりに話す。

それほど傷んでいた建物であるにも関わらず、壊して新築にするのではなく、手間をかけて「蘇生」させたのには、いくつかの理由があった。ひとつは、ここが国立公園であり、新築の許可申請が難しかったこと。そして、隣接する立地で同じ年代の建物を再生して、ホテリ・ア

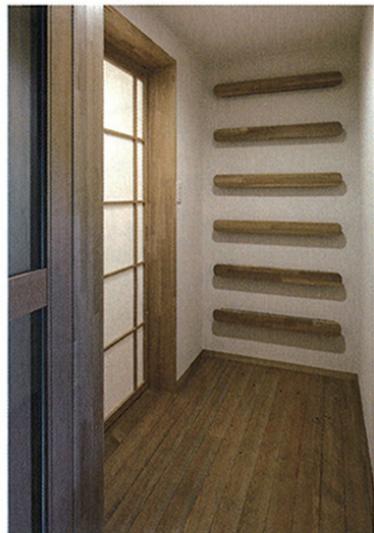




宗像さんに、再生ならぬ「再生」を決意させたという三角屋根のチャーミングな外観。1階部分に見えるのがテラスの部分になる。



3



2



1

ここで休日を過ごした家族は、どこが気に入りの場所だったかなと考える

1 玄関を入ると、まずこの空間に迎えられる。左側は荷物を収納できる棚。小さなソファのある空間はちょっとしたくつろぎのスペースにもなっている。

2 ドアを開けると、左手の玄間に誘われる前にまずこのスペースがある。正面の壁の飾りはスキーなどを立てかける機能性も併せ持つ。

3 開口部の美しさは益子作品の真骨頂。明治時代の大噴火で飛ばされてきた岩と緑が織りなす裏磐梯ならではの風景が窓の外に広がる。

4 エントランスよりベッドルームを見る。こぢんまりとした空間だが、ベッドの高さを低くしたことで広さを感じられるように。

5 眺めのいい浴室。温泉ではないが、森林浴をするような気分で入浴を楽しめるのはなんとも贅沢である。

6 1階のベッドルームからテラスを見る。心地よく風の通る空間とドアでつながる構造によって、ベッドルームの魅力が増した。

7 窓に防虫網戸が施された快適なミッドスペース。益子さんは宗像さんとともに旅したスリランカでの見聞からヒントを得たという。

アルトを開業した宗像さんは、既存の骨格を生かして新たな空間を創造する醍醐味を知っていた。また、そうした手法の名手である建築家の益子義弘さんとの仕事をあれば、それが可能であることも。こうしてプロジェクトが始動した。

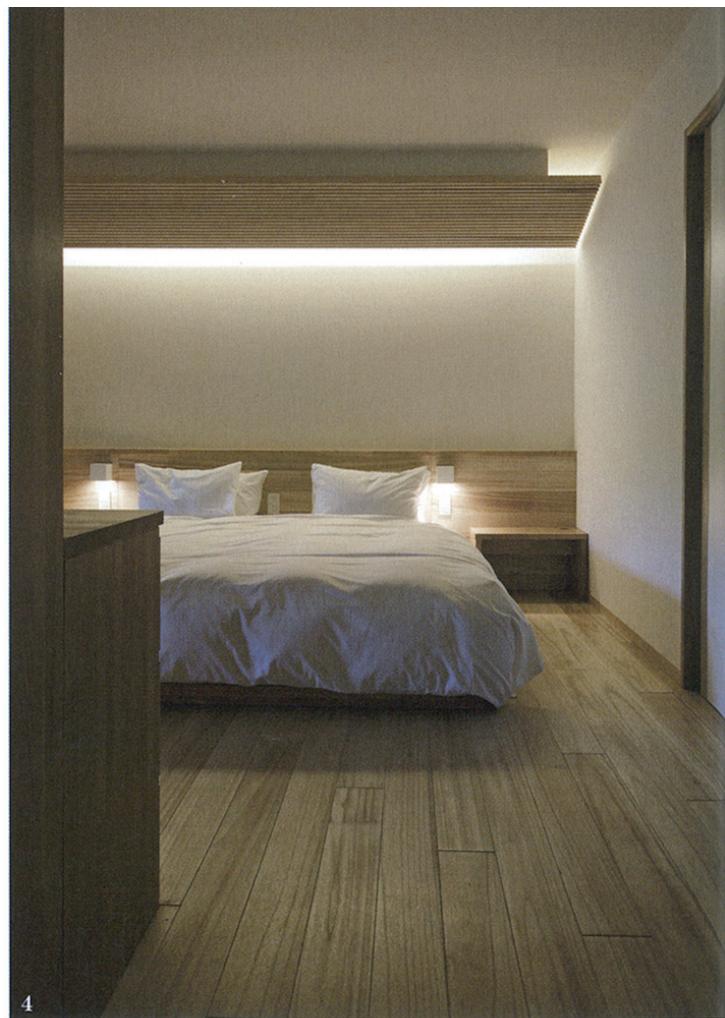
「土地を読んでゆくのと同じように、骨格を読み替えてゆく。不自由ではあったけれど、だからこそ、密度が上がりました」と益子さんは振り返る。

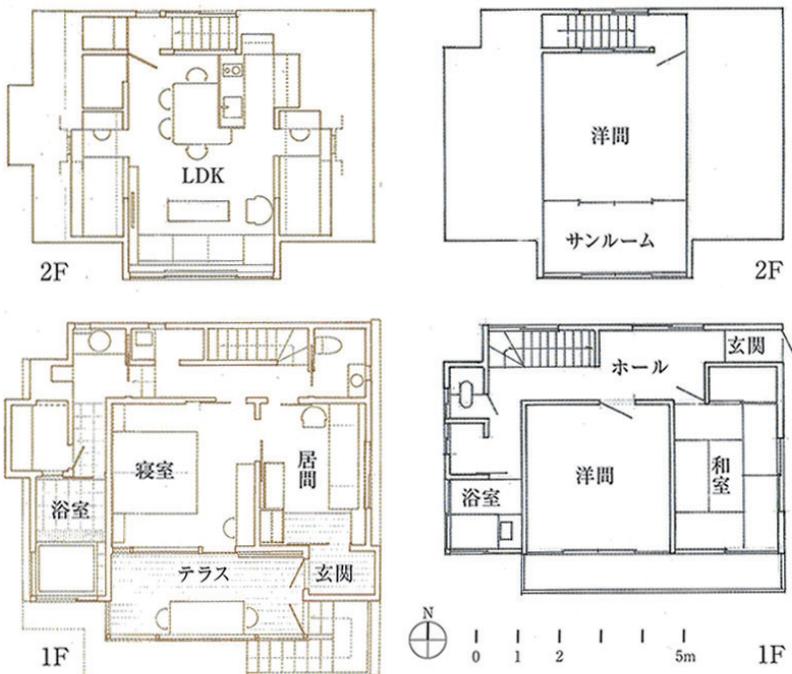
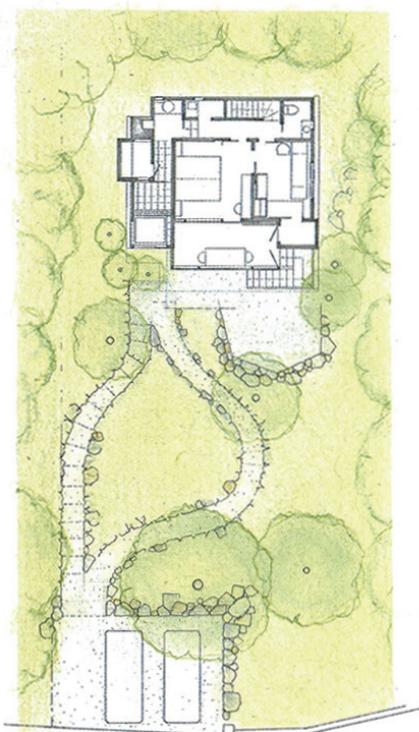
小さな家の骨格を生かすとなると、一階と二階、それぞれ大きな空間はひとつしかなかった。当初は二階をベッドルームにする案を考えた。しかし、左右に屋根の傾斜による屋根裏のような空間があつた。真ん中にベッドルームを置くと、そこがデッドスペースになる。並んで大勢寝らるるようにはすれば、合宿所になってしまう。

どんな人たちに使つてもらうのか、それを整理する必要があった。導き出された回答は「ふたりが豊かに過ごすことのできる空間」。そこからベッドルームは、一階に置くことが決定した。そうなれば、リビングとダイニング、キッチンの機能を持つフリースペースは、おのずと二階になる。これらを収めるのがひと苦労だったという。いろいろな人が短期間過ごす貸別荘的用途であることを考え、キッチンはコンパクトにし、造りつけのテブルをはめ込んで、必要十分だけれど無駄がない、絶妙な空間が生まれた。

屋根裏として捨てていた場所は、ふたつの小さなベッドルームになった。秘密基地めいたプライベート感とリビングとの緩いつながりの両方が感じられる不思議な空間は、結果的にとても魅力的なものになつた。

次に議論となつたのは、一階のトイレの位置と、荷物を置くスペースのせめぎ





改修後

改修前

リビングのテーブルは、どこに座っても窓から緑が目に入るようにしたかった

1 左右にふたつ設けられた小さな寝室。屋根の斜度を生かした屋根裏部屋風の空間は、落ち着けるプライベートスペースになっている。

2 造りつけの家具も益子作品の魅力のひとつ。特にテーブルは、人と人の関係性をつくるものとして丁寧にデザインされる。

3 左右に設けられた小さな寝室（写真1）には、こんな通風窓が設けられている。仙台の家、ホーリー・アアルトにもある通風窓の小型版。

4 階段はもともと玄関から回り込む位置に置かれていた。配置をえたことによって全体の動線に無駄がなくなった。

5 コンパクトにまとめられたダイニングとリビング。限られたスペースで最大限のゆとりを感じさせる秀逸な設計だ。

6 端正なキッチンスペース。アアルト・ロッジの用途から考えて、本格的な調理は行わない前提で最小限の設備にまとめている。

合ひだつた。当初は階段の下をトイレにして、大きめの物入れを設ける案を考えた。しかし、それではせせこましくなってしまう。そこで、物入れに想定した空間をトイレにして、荷物を整理する場所は、玄関を入ってすぐのスペースをあてることにした。小さめのソファなども設えて、最初に家に迎え入れる場所としての端正さが整えられた。

一階にはもうひとつ、ロッジの顔ともいえるすてきな場所がある。それが家の正面、ベッドルームの外側に位置するテラスである。別荘建築や南国リゾートでよく見られるオープンエアのスペースだが、防虫網戸を入れて、快適に過ごせる工夫が施されている。

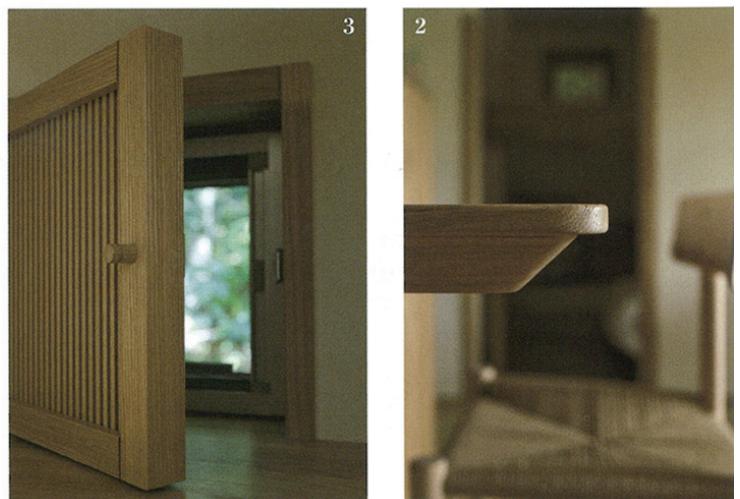
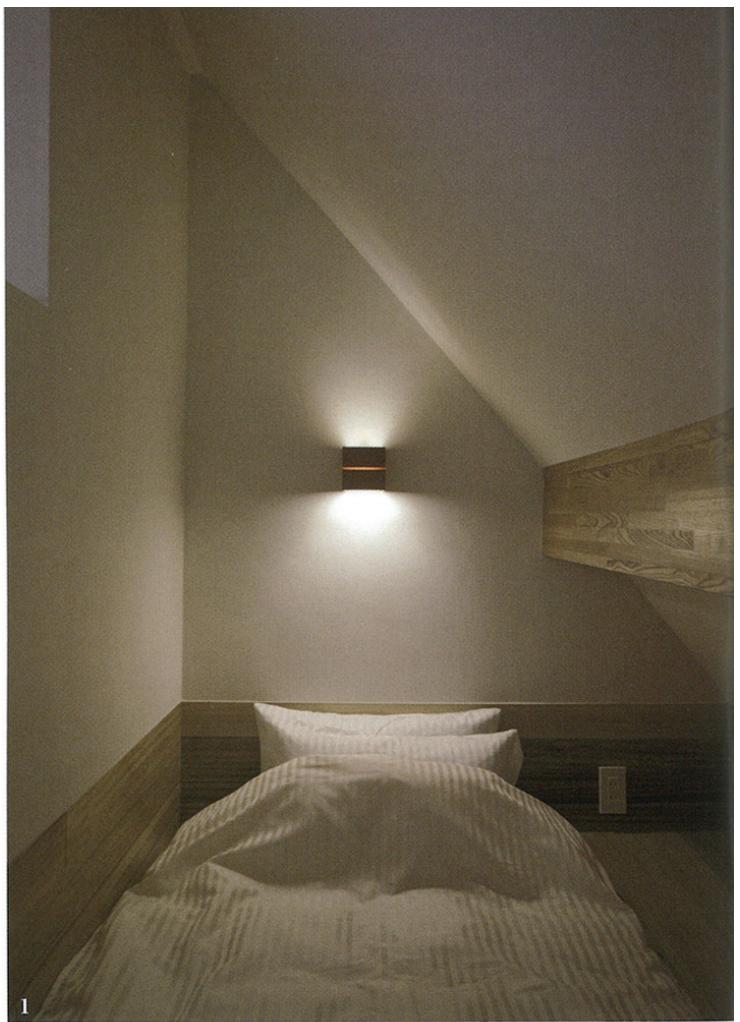
元の骨格を尊重したのは、数十年前に一生懸命に設計した、その思いを感じたからもあるという。昭和四、五〇年代は、別荘という考え方がかつての富裕層

からもう少し広がつていった時代。裏磐梯は、そうした時代に開発された、戦前から歴史のある軽井沢などとは異なる、遅れてきた別荘地だった。

「ロケハンがうまかった明治時代の外国人が、なぜここを見つけなかつたのかと思いましたが、考えてみれば、磐梯山が爆発していたんですねよね」と宗像さんは言う。

磐梯山の大噴火は一八八八年（明治二二）年。その噴火があったからこそ、周辺の湖沼群が生まれ、火山岩が点在する風景が生まれた。

そして、その環境があるからこそ、絶妙に切り取られた開口部に命が吹き込まれる。リビングのテーブルは、どこに座つても緑が見えるよう窓が配置されてい。る。そして、大きく外に向かって開いたテラス。自然に抱かれる幸せがここにはある。



毎日、近所を散歩する住民のひとりは、この家にすっかり惚れ込んで、いつか譲つてもらいたいと願っているとか。住宅街に溶け込んで佇む外観はなんとも端正で美しい。

家の居心地のよさを象徴するのは、ひと続きになつたりビングルームとダイニングルームの空間だ。庭に面して開口部が大きく開け、ガラス戸、簾戸、障子戸からなる三つの建具によつて、外と内のつながりの変化を住まい手が自由に選び、楽しめるようになつている。ホテリ・アルト、アルト・ロッジでも使われてゐる小格子のあしらわれた通風窓もここで発案されたという。

二〇〇七（平成十九）年に完成した「仙台の家」は、夫婦と子どもふたりという家族の暮らしを想定して、建築家の益子義弘さんが設計したモデルハウスである。ここを出発点として、ホテリ・アルト、アルト・ロッジに至る、八光建設およびラボットの宗像剛さんと益子さんの居心地のいい場所を創造する道のりが始まった。



1

住まいのよりどころ —「仙台の家」を訪れて—

1 玄関のある正面から見た外観。大きな開口部のある中庭側から見た開放的なイメージとは対照的な雰囲気がある。

2 和室の外側に設けられた縁側。リビングダイニングの外側には、石の縁側がある。縁側は日本家屋ならではの魅力的なスペースだ。

3 2階の主寝室。機能的にレイアウトされた造りつけの収納家具とくぼみのある天井の造りが、ゆったりとした空間を演出する。

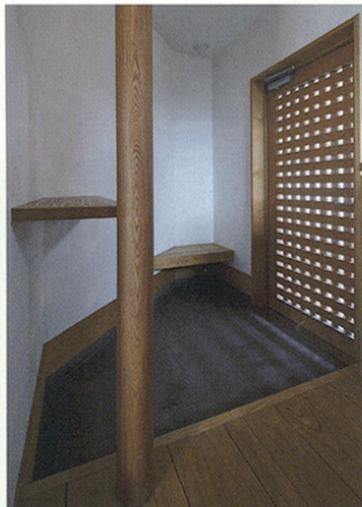
4 ゆったりとした玄関。丸い柱と互い違いに設けられた棚が心地よいリズムを演出している。なんとも美しい空間だ。

5 「仙台の家」は子どもがふたりいる30代の夫婦を住まい手と想定して設計された。居心地のいいダイニングの奥にキッチンはある。

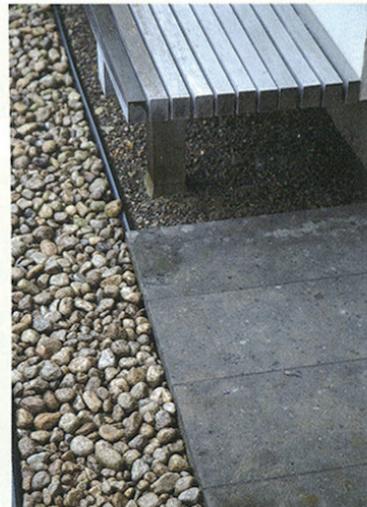
6 丸い柱は構造上の必要だけではなく、廊下のスペースとリビングを暗示的に分けるという機能も果たしている。廊下の床材はクリの木。

7 このテーブルも益子さんの設計によるもの。目立たない薄い引き出しがついていて、ランチョンマットなど小物を収納できる。

8 リビングダイニングは、中庭に向かって大きな開口部が開けている。この開放的な雰囲気が「仙台の家」の最大の魅力である。



4



2



5



3



6



8



7

益子 ここは、まわりが住宅街の外れで

何もないところでしょう。まつさらな土地で、何もよりどころがなかつたので、最初にまず木を植えることを想定して、スケッチを始めたんです。もちろん古い家の場合は、昔からある庭などを捉え直していくことが基本だけれど、何もないところでは、住まい手に何か一本、木を植えませんか、ということからスタートすることがよくあります。

――住まいでは、よりどころをつくる
ことがまず大切なのですね。

益子 居場所のよりどころになる根を植えるという感じですね。僕のやり方といふか、性格ではあるけれども、それをこなして、細かに生活する人に押しつけるんじやなくて、理想的に言えば、場面をつくりすぎないで、居場所のよりどころとなる根を植える。それを家族が自分の生活の中で育っていく。そんなことができれば、その人たちのキャラクターに沿った場所の特性も出てくる。適度なよりどころがあると、生活の場面で気持ちが豊かになります。

—— 家具もデザインされます、それ
もよりどころのひとつですか。
益子 例えば、テーブルもひとつのより
どころですよね。ものをつくることで、

人ととの関係を助けることもできる。テーブルの形や大きさを工夫することによつて、人と人が気づまりなくいられるようになります。昔、おもしろいことがありましたね。藝大の教官室に吉村順三先生が大きな丸いテーブルを据えたんですね。それまで教官室は、教授がいて助教授がいて、序列ができるような四角

居心地のいい場所をどうやってつくるかに尽きると思う

いテーブルだつたんですよ。でも、丸いテーブルになると、みんなどこに座ろうが対等なんです。すごく話の弾み方も違ってきて。丸テーブルの不思議な効果ですね。もののデザインというより、人の関係のデザインなんですね。

るから、閉めてやわらげる。でも、完全に閉じた状態ではなくて、内からは少し外が見える。でも、外からは見えない。外の気配は感じるけれど、ある程度は分けられる。それが簾のすてきなところです。通気性もあって、音は遮断しない。

――改めて、住み心地のいい家とは、どういうものなのでしょうか。

――改めて、住み心地のいい家とは、どういうものなのでしょうか。

益子 難しいことではなくて、家族なり人なりがどうやつてときを過ごすか、居心地のいい場所をつくるかに尽きると思うんです。僕は写真に撮って美しい作品をつくるうなんて全然思っていない。居場所に適うスペースの骨格を設定できたら、住まう人が育っていくものだし、子どもが汚したり傷つけたりして、自分の家になつていくのです。

心地のいい場所をいかにつくつ
ていくかに尽きるんですね。

るから、閉めてやわらげる。でも、完全に閉じた状態ではなくて、内からは少し外が見える。でも、外からは見えない。外の気配は感じるけれど、ある程度は分けられる。それが簾のすてきなところです。通気性もあって、音は遮断しない。—— 障子を閉めると、また違った感じになりますね。

心地のいい場所をいかにつくつ
ていくかに尽きるんですね。

が脱却できないでいるんですよ。それ
味でついつい障子を使つてしまふ。それ
けれど、障子の機能性は大いにあつてね
ニユートラルな光、断熱性、いろんな意
味やうからなんとかしたいと思うんだ
す。障子を使うと、どうしても和風にな
るし、保温性もあります。

心地のいい場所をいかにつくつ
ていくかに尽きるんですね。

障子は和風のデザインの代名詞のようになりますが、機能性が大きいんですね。

する。そんな様子を観察して、新しい家の設えに生かしていく、場としてどうなるかを助けることなんですよ。

益子義弘さんに聞く。

A portrait of a man with glasses, wearing a white shirt, sitting in a room with large windows and yellow lamps.

益子 障子は軽いし、扱いが楽だし、軽やかで邪魔にならない。使いやすくて魅力ある建具です。

—— さらに外側の軒下には、石の濡れ縁があります。

ますこ・よしひろ 建築家。東京藝術大学名誉教授。1940年東京生まれ。1966年東京藝術大学美術学部建築科修士課程修了。益子アトリエ主宰。土地と暮らしの結びつきを追求した住宅で知られる。1996年に「金山町火葬場」が日本建築学会東北建築賞入賞したほか受賞多数。著書に『湖上の家・土中の家』(農文協)など。



1 それぞれの部屋の入り口には、こんなかわいらしいナンバープレートが掲げてある。鍵のイラストは建築家の益子義弘さんのスケッチ（撮影・飯貝拓司）。

2 裏側から見た外観。右手に伸びる屋根が唯一の増築であるダイニングになる。雪道をさらに進むとスノーシューの楽しめる沼がある。

住宅建築のもつ
心地よさを
継承する
リゾートホテル。



ホテリ・アアルト

宿にはその宿なりの
気質がある。
そこを探すのが
おもしろい。

日本
宿紀行
福島・裏磐梯

文 山口由美

冬

のさなか、ホテリ・アアルトを再訪したのは、冬にこそ、本当の魅力がわかると聞いたからだった。

雪の季節に語られてこそ、その二疊であるホテリ・アアルトは、裏磐梯の五色沼にほど近い場所に建つ。福島、山形、新潟の三県にまたがる磐梯朝日国立公園の一部、磐梯山の北側に広がるエリアが裏磐梯だ。天然温泉にも恵まれ、春夏秋冬の楽しみがある。

に染まる秋よりも、私は冬に訪れてみたかった。
いかにも山荘らしい佇まいの大屋根が印象的な外観。中に入ると、端正な空間がやさしく包み込むようにゲストを迎える。

凛とした寒さ、それゆえの静寂。それらは、ホテリ・アアルトの存在をより際立たせていた。冬に来たのは、やはり正解だった。

の宿にも似ていなかつた。デザインが声高に何かを主張している訳ではなく、むしろ反対なのに、なぜなのだろう。理由を探すうちに気がついた。宿でありながら、住宅の併まいと居心地があるのだ。家庭的であることを売りにするベンションや民宿は数多あり、ほとんど住宅のようだつたりもする。だが、そういうところは、どこか安っぽくて、そこで過ごすことにお金を払う価値が見出せないことが多い。でも、ここには、大切な休暇を過ごすところとして、裏切られることのない上質な空間がある。

そう感じる理由のひとつがスケール感なのだと思う。併まいは住宅なのだが、スケール感はホテルのそれに近いのだ。オーナーの宗像剛さんは言う。

「住宅のスケール感とホテルのスケール感の中間を狙いました。抜け感とプライバシーのバランスも大切にしています」
それを特に感じさせるのが、一階のリビングルームだ。ホテルであるから、ロビーと呼ぶべきなのかもしれないが、到着してほつと腰を下ろす場所であり、夜にはバーになる、くつろぎの空間である。見上げると、天井にえぐったような凹凸があり、それがなんとも言えない抜け感をつくり出している。

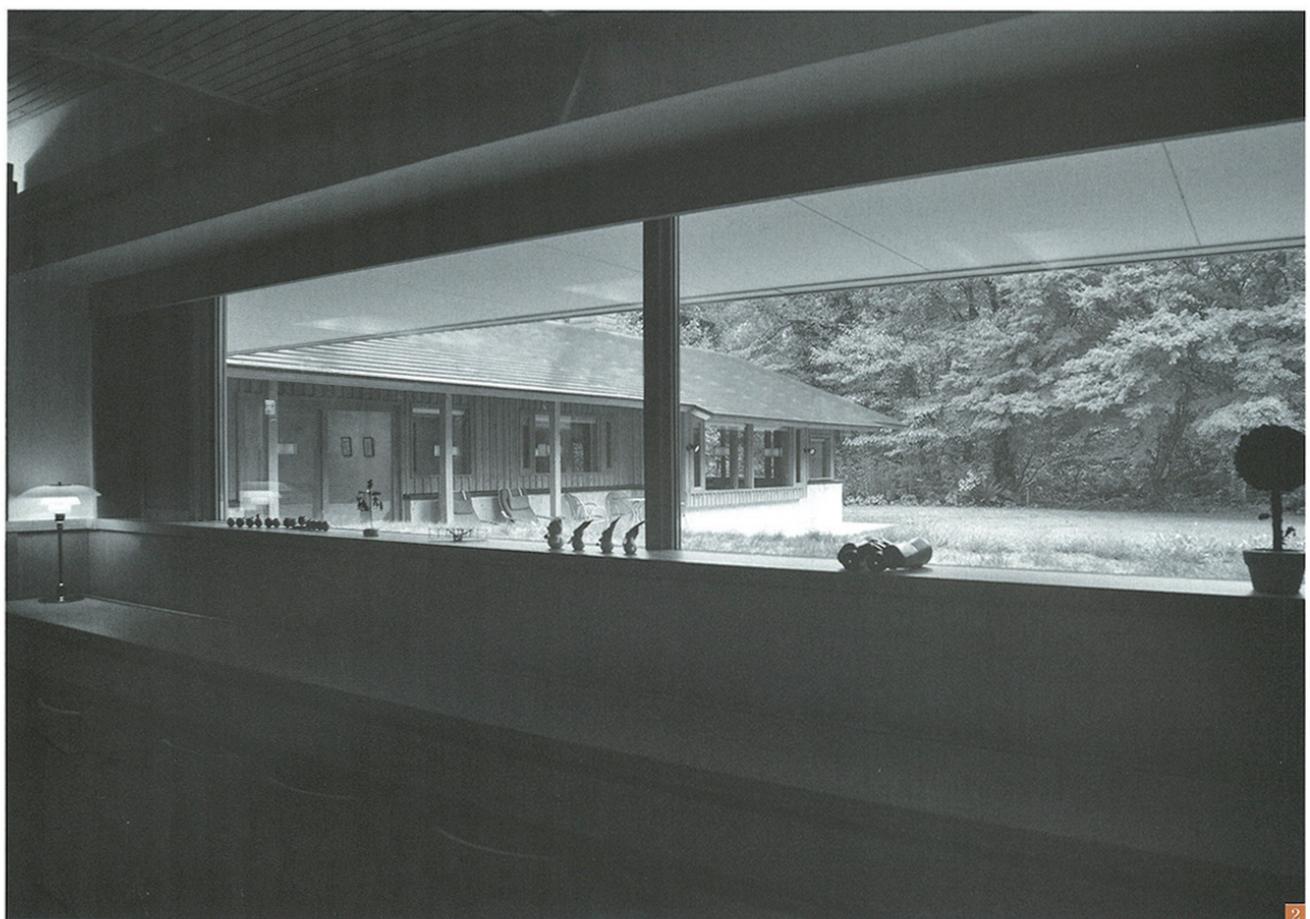
住宅建築の心地よさを継承するホテル、それは、ホテルではなく、建築を専門とする人の理想から誕生した。

福島県郡山市の工務店、八光建設の二代目だった宗像さんは、心の奥底でいつか宿泊施設を手がけたいと思っていた。

ホテルのスケール感と
住宅の佇まいを
併せもつ
希なる建物

- 1 ダイニングルームの空間の仕切りにあしらわれていたのは、輪っかを連ねた「のれん」のようなかわいらしいデザイン。
 - 2 開口部の美しさを象徴するのがリビングルームの大きなピクチャーウィンドウだ。居ながらにして外の自然を体感できる。
 - 3 304号室は、赤い椅子が印象的なセミダブルベッドの部屋。ゆっくり贅沢な時間を過ごしたいひとり旅にぴったり（1～3撮影・飯目拓司）。





2



3

出

会いは偶然だった。

もともとこの建物は、ある百貨店が保養所として建てたものだが、その後、埼玉県上尾市の手に渡り、山荘として利用されてきた。そのメンテナンスを担当していたのが八光建設だった。

宗像さんは、すぐに周囲の自然環境が気に入った。そして二〇〇七年、山荘が閉鎖すると聞くや否や、これを取得して宿泊施設として運営することに決めたのだ。

築四十年の山荘を建て替えるのではなく、改築することにしたのは、国立公園内ということで制約が多くなったこともあらが、なによりも「捨てない、壊さない」をモットーとする宿の再生が、宗像さん

の建築の理想に重なったからだった。

その理想をかたちにしたのが、三人の建築家である。中心になったのは、住宅建築の名手として知られる、東京藝術大学名誉教授の益子義弘さん。そして、雪深いこのエリアの建築に詳しい大竹慎太郎さんが、地元とのつながりや環境省への対応を担当し、ヨーロッパでの経験があり、ラグジュアリーとは何かについて見識のある河合俊和さんが、イメージをプランニングするサポートを行つた。

とりわけ益子さんことを語るとき、宗像さんの口調は熱を帯びる。雑誌などで作品を見て、その端正な線の美しさに魅了された彼は、初めて山形県最上郡にある金山町の火葬場を訪れて、深い感銘を受けたといふ。

「写真で見たときよりも、もっと包容力があるんです。清楚だけれど、温かくて、やさしさがある。益子さんの建築に包ま

れていると、自分自身が穏やかになります」

土地に向かう姿勢、土地を解き明かす分析力の確かさ、それが端的に表れるひとつが、窓の切り取り方だという。

リビングルームには、ピクチャーウィンドウのように景色を切り取る窓が設けられていて。この開口部により、ゲストは、自然と一体になった空間を感じることができる。

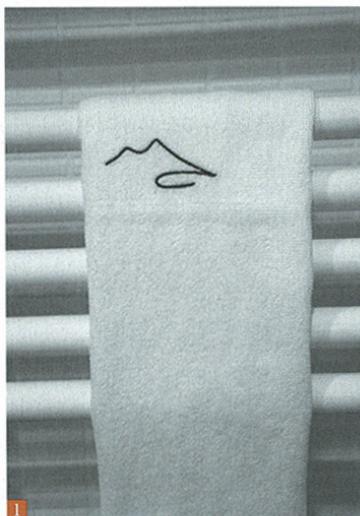
アアルトに滞在することの醍醐味ではないだろうか。
さらに、温かな空気そのものにも秘密があるとのことだった。
まずは、建物の素材にこだわることで室内の空気を汚さないようにしている。壁は漆喰を塗り、床には県産の木材を使用している。キリ、マツ、スギを使い分けているが、キリは特に温かさを感じられる材だという。

そして、暖房は廃湯を利用して温めた水をボイラーで沸かした温水バネルヒーターを用い、空間を暖めるようにしている。結露がまったく生じないのは、窓に温かい空気が対流するように工夫しているからだ。

客室は全部で十三室。すべてレイアウト

中と外を結ぶ ピクチャーウィンドウが もたらす 自然との一体感

- 各部屋のバスルームに設置された暖房式タオル掛け。タオルに刺繡されたホテリ・アアルトのモチーフ。
- 畳敷きの部屋とツインのベッドルームからなる202号室は、家族連れや友だち同士など、幅広い用途に対応できそう。
- 入ってすぐにベッドがあるレイアウトのアクセントになっている、ついたてのような仕切り。デスクやソファも機能的に配置された203号室。
- 離れたスイートルーム。手前のテーブルは掘りごたつになっている。リクライニングチェアに座って眺めを楽しむのは至福のひととき。
- 北欧スタイルのペンダントライトと椅子が印象的な304号室。和と北欧の融合はホテリ・アアルトのテーマのひとつだ。



1



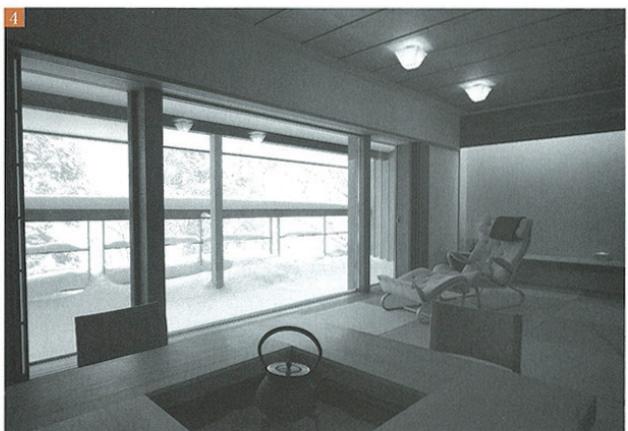
2



5



3



4

トが異なるのは、既存の骨格を生かした

がゆえ。でも、それがおもしろい。ひとり

旅によさそうな部屋、カッブルにふさわ

しい部屋、友だち同士で楽しめそうな部

屋、好みの部屋を探す楽しさがある。ひ

とつだけ、スイートルームが離れになっ

ている。ここはかつて山荘だった頃、管

理人の住まいだったところだという。

デンマークのハンス・J・ウェグナー

の椅子が効果的に配された、清楚でシン

プルな空間は、どこか北欧を感じさせる。

北欧のライフスタイルと日本の融合は、

ホテリ・アアルトのコンセプトでもある。

宗像さんは北欧に惹かれた理由を「東

北と似ているから」と話す。

「東北と同じように厳しい自然に向き合

北

ライフスタイルに興味を持ったのです」
歐と言えば、ホテルの名称も
そうだ。

ホテリ・アアルト。これは
フィンランド語で、「ホテリ」はホテル、
アアルトは「波」を意味する。

だが、アアルトと言えば、誰しも建築
家、アルヴァ・アアルトを連想すると思
う。

フィンランドが生んだ二〇世紀を代表
する建築家。家具や日用品など、北欧デ
ザインの巨匠でもある。建築を手がけた
益子さんも、北欧の建築やデザインには
大きな影響を受けたと明言しているが、
それだけに自身の設計したホテルに「ア
アルト」の名前が冠されることを固辞し

「ならば、先生は知らなかつたことにし
ましよう」と決めたのは宗像さんだつた。

「フィンランドを旅していたとき、ラジ
オの周波数、または波という意味の
aaltoの文字をチューナーのディスプレー
に見つけたのがきっかけでした」

ちょうどホテルのプロジェクトが進行
中で、名称を検討していたタイミングだ
った。「アアルト」に同じくフィンランド
語でホテルを意味する「ホテリ」を重ね
ることで、フィンランド語で「波のホテ
ル」になる。だが、もちろん建築家、ア
アルトを知る人は、そこから建築家を連
想し、アアルトに対するリスクペクトを感じ
ることができる。

こうして、なんとも不思議な名前のホ
テルは二〇〇九（平成二二）年四月、開
業したのだった。

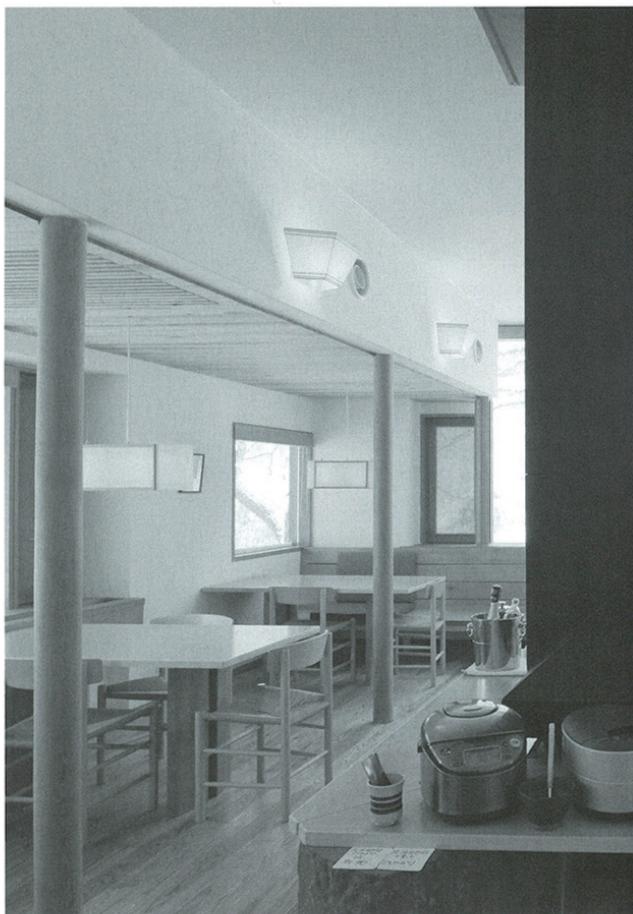
冬になると、リビングルームとダイニ
ングルームをつなぐ通路の片隅にレンタ
ルのスノーブーツやスノーシューが置か
れる。周囲にはスキー場もあるが、ゲス
トは、ホテルでのんびり過ごす人が多
い。だが、窓から見える雪景色を体
感してこそ、冬の裏磐梯の魅力も見えて
くる。そのための誘いだ。

ホテリ・アアルトの敷地には、小さな
沼があつて、春から秋にかけては散策、
冬はスノーシューで楽しむことができる。
一八八八（明治二二）年、磐梯山の大
噴火によって、裏磐梯は一面の荒れ地に
なつた。そのとき、生じた岩なだれで川
が堰き止められ、五色沼など一帯の湖沼
群が生まれた。大小三百余りの湖や沼が

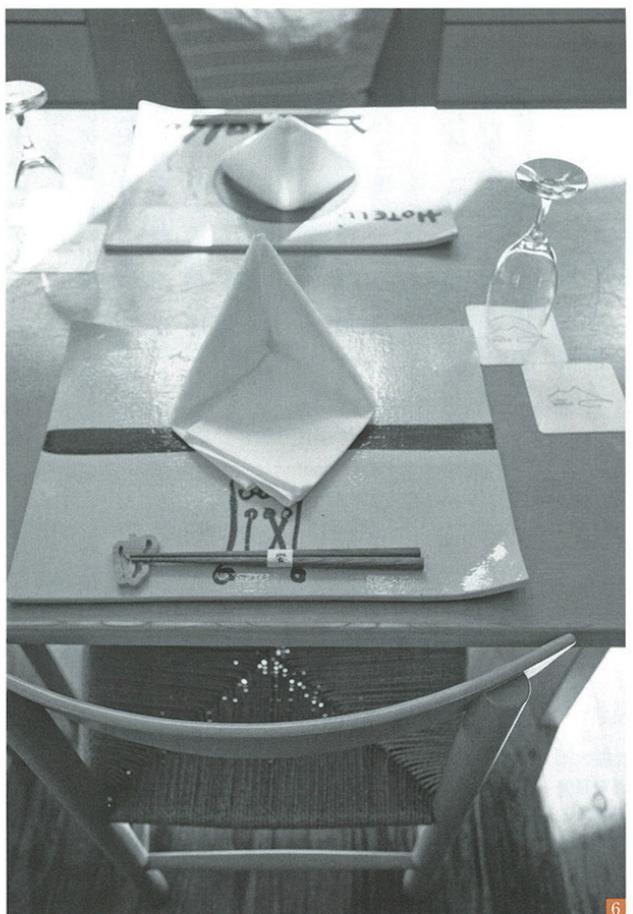
暖炉を囲み 時間をかけて ゆっくり味わう 地元の食材と料理

- 1 雪景色の中に佇むホテリ・アアルトの正面外観。大屋根のフォルムが裏磐梯の自然豊かなロケーションによく似合う。
- 2 ホテリ・アアルトの敷地内にある名もなき沼。緑の季節も美しいが、静寂の中に佇む雪景色の凜とした美しさは忘れられない。
- 3 ダイニングルームの大きな窓の外には、折々の季節の表情が移ろう。緑の季節もまた美しいことは言うまでもない。
- 4 ピュッフェスタイルで並ぶのは主に和食のアイテム。そのほか、洋風の卵料理などが載ったプレートがテーブルにサービスされる。
- 5 朝食は、薪ストーブのまわりを囲むように料理がざらりと並べられ、好きなものを取って食べるピュッフェスタイルになる。
- 6 ディナーのためのテーブルセッティング。大きな陶板のショープレートが印象的。この上に次々と料理が並べられる（撮影・飯貝拓司）。





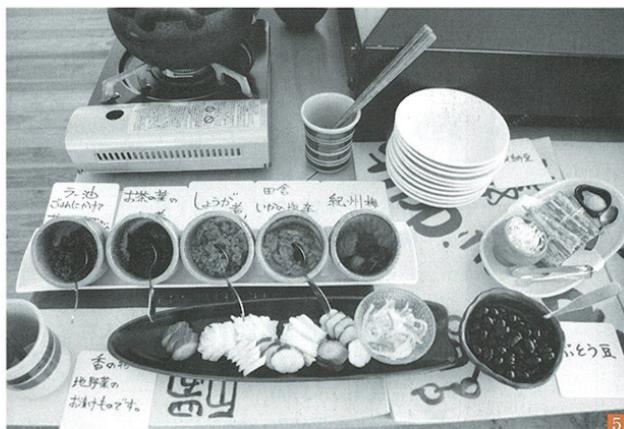
3



6



4



5



冬の滞在で感じる安堵感。
それがこのホテルの
もつ資質を
なによりも物語つている

冬は雪見風呂が楽しめる。火山の恵みとともにある裏磐梯。ホテリ・アアルトは天然温泉が楽しめるのも魅力のひとつである。

ホテリ・アアルト
客室 本館12室 離れ1室
構造 本館地下:鉄筋コンクリート造
本館1,2階と離れ:木造
敷地 6800坪
福島県耶麻郡北塩原村大字檜原字大府平
1073-153
Tel.0241-23-5100
www.hotelliaalto.com/

あるが、ホテリ・アアルトにあるような名もなき沼も多い。
ダイニングルームの中央にある暖炉を囲むように配された岩も、噴火で飛ばされたもので、敷地内から運ばれたという。厳しい自然と向き合いながら、その恵みを受けて、裏磐梯の美しさがある。初夏に訪れたとき、まばゆい緑に包まれていた沼は、色彩のない静寂の中にあつた。ふわふわの雪の上を歩く気持ちよさ。白い吐息の先に、墨絵のような風景が広がっていた。

宗像さんは、これまでで一番うれしかったのは、台湾から来た旅慣れた客の「ホテリ・アアルトにはいらないものがない」と語った評価だという。

足りないものはあるかもしれない。でも、無駄なものはない。雪景色のホテリ・アアルトは、そうしたありようこそ、本当の豊かさがあることを教えてくれる。スノーシューから帰ってきた私たちを温かな空気が包み込むように迎えてくれた。

やまぐち・ゆみ 1962年神奈川県箱根町生まれ。慶應義塾大学法学部法律学科卒業。旅とホテルをテーマにノンフィクション、小説、紀行、エッセイ、評論など幅広い分野で作品を発表している。日本旅行作家協会会員。日本エコツーリズム協会会員。

